東北大学国際文化研究科
同窓会会報
VOL. 23
2025.3
GSICS TOHOKU UNIVERSITY

新同窓会会長挨拶

劉　庭秀（2025 年度研究科長、国際政治経済論講座 教授）

同窓会会員の皆様、新しい同窓会長に就任しました、劉 庭秀（ゆ じょんす）と申します。日頃から国際文化研究科同窓会をご支援いただき、誠にありがとうございます。

昨年 12 月に開催されました、国際文化研究科創立 30 周年記念行事は、お陰様で大変盛会でした。30 周年記念行事の中で、研究科初のプロモーションビデオを披露し、基調講演では我々が地球規模課題にどう向き合っていくべきかについて「国際文化」の視点で考えさせられる貴重なお話を伺うことができました。そして、本研究科の修了生 3 人によるミニ講演とトークイベントは、同窓会の皆様も感慨深いことが多かったのではないでしょうか。これを切っ掛けに国際文化研究科同窓会の活動がより活性化できれば幸いです。

さて、近年、深刻な地球温暖化による気候変動が顕在化し、世界各地で地震、津波、洪水、台風、山火事など自然災害が頻発しております。また、世界各地で、戦争や紛争が絶えず、人類は持続可能な社会形成の重要性を認識しているものの、問題解決に向けた具体策を講ずるための国際的な合意が得られていない状況です。多様、かつ複雑な地球規模課題を解決するためには、分野横断的な視点が重要であり、まさに「国際文化研究」の考え方と研究成果をベースに、多方面で活躍されている皆様の力が試されている時期です。国際文化研究科は、30 年以上の研究・教育実績と経験を活かした研究と教育を通して次世代に持続可能な社会を残すためにどのように貢献できるのか、そのために必要なものは何かを考え、社会課題解決に向けて行動しなくてはならないと思っています。

皆様もご存じのように、東北大学は、昨年末、日本初の「国際卓越研究大学」に認定されました。今後、25 年間、政府から様々な支援を受けることになりますが、世界トップレベルの研究論文を積極的に発信することが重要であり、産学連携による研究成果の社会還元、スタートアップや寄付金受入拡大を通して自立した大学運営を目指さなければなりません。国際文化研究科はさらなる研究力向上、そして国内外から優秀な学生の受け入れ、産学連携を推進していくことが求められます。

初の国際卓越研究大学としての責任は重いですが、30 年以上の歴史を持つ国際文化研究科のポテンシャルと同窓会の皆様の力を合わせて、国際卓越研究大学に相応しいパフォーマンスを出していきたいと思います。特に、本研究科で積極的に推進している国際共同研究、産学連携共同研究、英語による大学院教育プログラムは、国際卓越研究大学の重要な柱になるはずです。国内外の有名大学、研究機関、民間企業との共同研究を通して、研究・教育・社会連携のネットワークを広げた上で、その成果を社会に積極的に発信・還元していきます。本研究科は他研究科に比べて、留学生や外国人教員の比率が高く、国際的に活躍する修了生を多く輩出していますので、今後の成果を期待できると考えています。

私は 32 年前に留学生として来日し、本研究科では 25 年間教員として務めてきました。工学部出身ですが、こちらには文理融合研究・教育を担当する教員として採用され、長年分野横断的な融合研究・教育、産学連携を行っています。昨年の 30 周年記念行事では、本研究科の創立時から務められ、数年前に退職されたある先生から「国際文化研究」の定義が非常に難しく、どのような研究が「国際文化研究」に当たるのか未だに確信がないというお話がありました。確かに私も「国際文化研究」のハッキリとして定義を語ることは難しいですが、皆様がそれぞれ行ってきた研究内容、皆様が考えている定義が「国際文化研究」だと思います。そういう意味では、国内外の様々な国や地域から集まった仲間とのネットワーク（同窓会）を大事にし、新しい国際共同研究を企画したり、就職先の民間企業や自治体が抱えている問題解決のために産学官連携を試してみたり、講演会や展示会のような催しを開催してみたりしては如何でしょうか。

今年は、国際文化研究科のホームページを大幅に改修し、研究科の情報を積極的に発信していく予定です。研究科のホームページも同窓会のネットワークを強くする手段の一つになり得ますので、皆様のご活躍を是非とも研究科にお知らせ下さい。それでは、同窓会を媒介にする様々な活動が増えていくことを期待いたします。これからもよろしくお願いいたします。

国際文化研究科主催行事等報告

報告1 国際文化研究科 30 周年記念式典

江藤　裕之 （2024 年度研究科長、言語科学研究講座教授）

国際文化研究科は、グローバル化、ボーダーレス化が進む世界を背景にして、さまざまな地域の文化、その文化が生まれ発達する場となる社会、そして、文化の伝播と相互の理解に不可欠な言語を国際的視点、学際的観点から研究し、その成果を学生の教育に還元していくことを目指して、1993（平成 5）年4月1日、本学における最初の独立研究科、すなわち学部に基礎を置かない独立した大学院のひとつとして設立されました。正確に申せば、昨年が創立 30 周年であり、本年は 31 周年となります。しかし、昨年は研究科西棟の改修工事と重なったことなどから、30 周年の記念式典を一年延ばし、本年の開催といたしました。

研究科創立 30 周年記念式典は 2024（令和 6）年 12 月 7 日、冨永悌二東北大学総長はじめ、東北大学理事・副学長、各部局長、また国際文化研究科との産学連携パートナー企業よりのご来賓、そして、国際文化研究科の名誉教授、退職教員、修了生、そして現役の教員、学生の皆さまにお越しいただき、盛会のうちに無事終了することができました。

富永悌二総長からの祝辞

記念式典は冨永総長よりのご祝辞のあと、過去の3代にわたる国際文化前研究科長（小林文生先生、黒田卓先生、小野尚之先生）より、それぞれの在職時代の想い出と研究科への期待を込めたビデオメッセージをいただきました。それに続いて、30 周年の記念に作成した研究科プロモーションビデオ「グローバル社会へ向けての人材育成」が披露されました。これは、現在研究科に所属する 3 名の学生、一木優花さん（ヨーロッパ・アメリカ研究講座修士課程 2 年生）、程鑫（テイ・シン）さん（国際政治経済論講座、博士課程 2 年生、社会人留学生）、Victoria Anne Flood さん（英語コース International Graduate Program in Language Sciences 博士課程 2 年）に国際文化研究科を選んだ理由、研究の内容、将来の抱負について語っていただき、素晴らしい映像とともに作成した研究科紹介ビデオです。これは大変好評でしたが、研究科ウエブサイトに掲載するだけでなく、今後も学生募集のイベント等で使用する予定です。

記念行事の部の最初には、国連環境計画・金融イニシアチブ（UNEP FI） 特別顧問の末吉竹二郎先生より「日本の GX（Green Transformation）を考える産業政策か、包括的な脱炭素政策なのか」という演題での特別記念講演をいただきました。80 分もの長時間にわたり、聞くものを飽きさせることのない話しぶり、また大いに考えさせられる内容に大変感銘を受けたのは私だけではかなったようです。私たち日本人に潜む 3 つの弱点として挙げられた

“internal”ではなく、”external”でしか動かない
“Why？”ではなく、“What to do？”のみ
“de jure” ではなく、“de facto”だけ

これらの点については、今後の国際文化研究科運営、そして学生の指導にも大いに参考にさせていただけるものと思いました。

続いて、「国際文化研究科と私：過去・現在・未来」と題した修了生記念トークでは、高橋梓先生（近畿大学准教授 2013 年博士課程修了・ヨーロッパ文化論講座）、戸敷浩介先生（宮崎大学教授 2008 年博士課程修了・科学技術交流論講座）、呉蘭先生（山形大学講師 2013 年博士課程修了・言語コミュニケーション論講座）の 3 名の本研究科修了生にご登壇いただきました。それぞれから、国際文化研究科での学生生活、現在の自分の研究と仕事、これからの抱負を語っていただきましたが、特に印象に残ったのが、それぞれの指導教員、つまり恩師の先生方の想い出でした。また、モデレーターの坂巻康司先生、ジョン・ヒョンジョン先生らによる軽妙洒脱な進行もまた印象的でした。

修了生記念トークの様子

最後に、世界中で活躍している本研究科の同窓生の中から、今野彩さん（多文化共生論講座 2017 年 3 月 MC 修了）、三木良子さん（国際政治経済論講座 2023 年 3 月 MC 修了）、金廷珉さん（異文化間教育論講座 2008 年 3 月 DC 修了）の 3 名にいただいた心温まるビデオメッセージを披露しました。

末尾になりますが、ご多忙のところご来臨を賜りましたご来賓の方々、ご参会くださった皆さまをはじめ、本式典の企画、実行に携わってくださった関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。創立 30 周年の節目に、このような場を設けることができ、皆さまと集うことができましたのも、何かのご縁だと思います。これまで諸先輩方から受けついだ遺産をさらに発展させ、わが国初の国際卓越研究大学に認定された東北大学の一部局として貢献するため、さらなる飛躍に向けて、今後も一層の努力をしてまいります。

なお、記念式典・記念行事の様子は、当日のライブ配信の模様を YouTube に収録していますので、研究科プロモーションビデオと併せてご笑覧いただければ幸いです（本研究科ウエブサイトのトップページ上の「30 周年記念式典」からお入りください。

30 周年記念式典ポスター

報告2 国際文化研究科第 30 回公開講座

第 30 回公開講座「国際文化基礎講座」が（2024 年 11 月 12 日（土）にオンラインで開催されました。「国際関係における理念とその行方　―アメリカの過去と現在から」と題して、本研究科の教員2名が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。

第30回公開講座ポスター

「野蛮な異教徒」とアメリカ人―19 世紀ハワイ王国におけるアメリカ人宣教師の言説

目黒　志帆美
（多文化共生論講座　准教授）

アメリカに併合される以前のハワイは、先住民の王を戴く独立王国でした。しかし、1820 年以降、福音主義のアメリカ人宣教師がハワイで布教活動を展開したことで、社会は大きく変容しました。土着信仰と身分制を特徴とする伝統的なハワイ社会は、宣教師の影響を受けてキリスト教化され、近代化が進められました。特に 1840 年には立憲君主制が確立され、ハワイ国民すべての政治参加と私的財産の保有が保障される国家へと転換しました。一方で、宣教師とその子孫は、宗教活動にとどまらず、ハワイの政治・経済にも深く関与するようになりました。彼らは段階的に影響力を拡大し、19 世紀後半にはハワイの権力構造の中核を担う存在となります。そして 1893 年、彼らはアメリカ海軍とともにクーデターを引き起こし、女王リリウオカラニを退位させました。これによりハワイ王国は滅亡し、1898 年にはアメリカ合衆国に併合されました。このように、ハワイの

近代化は、宣教師の影響を受けて進められた側面がある一方で、彼らの政治・経済的な権勢拡大が王国の崩壊とアメリカへの併合につながったと考えられます。本講演では、1820 年代のアメリカンボード宣教師団のハワイ入植期に焦点を当て、宣教師たちが母国アメリカと伝道地ハワイをどのように捉えていたのかを、彼らが残した記録をもとに考察しました。

19 世紀初頭のアメリカでは、第二次大覚醒（リバイバル）の流れの中で海外宣教への関心が高まりました。その結果、1810 年にアメリカ海外伝道協会（American Board of Commissioners for Foreign Missions、通称アメリカンボード）が設立され、異教徒への布教が本格化しました。アメリカンボードがハワイを宣教先に選んだ背景には、ヨーロッパ人探検家の記録や貿易船船員を通じて 19 世紀初頭のアメリカにハワイの情報が伝わっていたこと、そしてアメリカ本土に渡ったハワイ人青年の存在がありました。

特に、ヘンリー・オブキアの生涯を描いた伝記は、ハワイ宣教の正当化に重要な役割を果たしました。彼は 1809 年にアメリカに渡り、アメリカンボードの教育を受けた後、キリスト教に改宗しました。彼の死後、アメリカンボードは彼の「野蛮な異教徒」から「敬虔なキリスト教徒」への転身を描いた『ヘンリー・オブキアの回想録』を出版し、ハワイへの宣教活動の意義を広く訴えました。この回想録はアメリカ本土では宣教活動の募金活動に、ハワイでは布教の教材として活用され、宣教師たちはオブキアを「キリスト教化した野蛮人のモデルケース」として位置づけました。

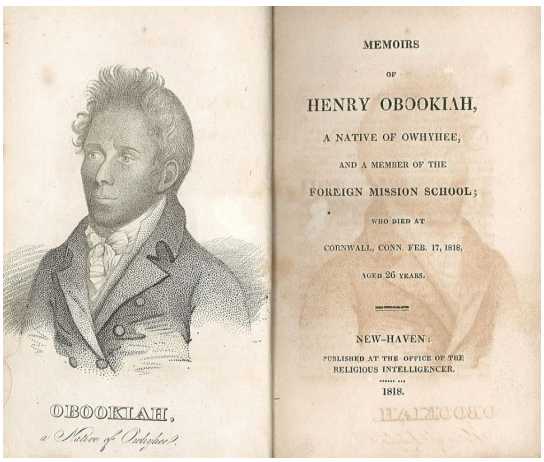
ハワイに入植したアメリカ人宣教師は、識字教育の推進にも大きく関与しました。ハワイにはもともと文字文化が存在しなかったため、宣教師たちはハワイ語の文字化作業を進め、聖書の翻訳を通じて教育を普及させました。その結果、1824 年には 2000 人のハワイ人が学校で読み書きを学び、1831 年には国民の約 4 割にあたる 52,000 人が教育を受けるようになりました。しかし、宣教師がもたらす識字教育に対しては、「呪いの力を持つ」として拒否するハワイ人もおり、西洋文明の導入に対する懐疑や抵抗が見られました。

また、ハワイ王国の政治体制の変革にも宣教師たちは深く関与しました。1820 年代には王族の多くがキリスト教に改宗し、国民に対し宣教師の教えに従うことを求めました。1827 年には「六つの禁止令」として殺人・窃盗・酒の販売・姦淫・売春・ギャンブルを禁じる法が制定され、1840 年にはハワイ王国初の成文憲法が制定されました。こうした法制度の整備には、宣教師の影響が色濃く反映されていました。

このように、アメリカ人宣教師の活動は、ハワイ社会において「宗教的伝道」にとどまらず、政治・経済領域にも拡大していきました。特に 1850 年代には宣教師の子孫を中心とする白人勢力が土地を所有し、砂糖プランテーションを経営するようになりました。彼らは経済的権力を握るとともに、1887 年には「銃剣憲法」を成立させ、国王の権限縮小と白人の政治的影響力拡大を実現しました。最終的に、1893 年のクーデターを経てハワイ王国は滅亡し、1898 年にアメリカに併合されるに至ります。

本講演では、アメリカ人宣教師がハワイ社会の変容にどのように関与したのかを、宣教師自身の言説をもとに分析しました。近年の研究では、このような宣教師の影響力の行使のあり方を「キリスト教帝国主義」「宣教師帝国主義」と捉える視点が注目されています。アメリカの対外政策理念の源流を考えるうえで、19 世紀初頭のハワイにおける宣教師の活動は重要な意味を持つといえるでしょう。

宣教師たちは「野蛮な異教徒」と「文明化されたクリスチャン」の対比を通じて、ハワイ社会の変革を推し進めました。彼らの伝道活動は福音を根拠としながらも、結果としてアメリカ的理念のハワイへの移植につながりました。この歴史を振り返ることで、現在の世界における文化の伝播や宗教と政治の関係について、改めて考える契機となるのではないでしょうか。



1818 年に刊行された『ヘンリー・オブキア回想録』

アメリカ大統領選挙と国際秩序観―ハリス陣営とトランプ陣営を比較して

松本　明日香
（国際政治経済論講座　講師）

2024 年 11 月 5 日にアメリカ大統領選挙が行われました。アメリカは国内総生産（GDP）および安全保障費と共に、いまだ世界のトップを占め、その影響は国際社会に幅広く及びます。候補者両陣営の国際秩序観はどのようなものでしょうか。アメリカ国民はどのように捉えているのでしょうか。当時のバイデン大統領の後継者のカマラ・ハリス副大統領とドナルド・トランプ元大統領の公約と政策から、その行方を見据えました。

はじめに、1941 年 8 月のローズヴェルト米大統領とチャーチル英首相間の大西洋会談や 1990 年のジョージ・H・W・ブッシュ大統領「新世界秩序」や、「法の支配（the rule of law）」にみられたアメリカを中心とした開放的で制度化された、協調的でリベラルな国際秩序が変質しているのではないか、との議論を整理しました。

過去にも 2016 年には既に米トランプ政権の「米国第一主義（America First）」政策や英ジョンソン政権の「ブレグジット（BREXIT）」などが見られ、逆に日本の TPP11 維持やドイツのメルケル首相の EU 維持が対照的なものとなっていました。

ジョン・アイケンベリー『リベラルな秩序か帝国か』

ただし、国際社会はもともと中心的な政府の存在しないアナーキーな世界であり、現在の動きはパワーポリティクスへの回帰であり、クローズド・ブロック化した世界の再到来との見方を紹介しました。米国の相対的な地位の低下と北部白人を取り合う政党再編によって、米国第一主義が台頭し、民主党政権でも引き継がれています。トランプ政権が再び成立したことにより、政策によっては大転換（エネルギー・環境政策、移民政策）またはより強硬化（関税強化、投資・土地買収等の制限）が見られます。台頭する新興国との距離感も、共和党は全体的に物流や交流を抑える「デカップリング」、民主党は部分的にリスク回避をする「デリスキング」と、両党でやや異なります。

2024 年選挙戦自体は、実質的な二大政党のアメリカにおいて、民主党・共和党それぞれ大統領経験者が候補としてほぼ確定していましたが、バイデン大統領が 6 月 27 日の討論会で苦戦し、かなり遅いタイミングでの撤退を 7 月 21 日に宣言しました。そのため急遽、女性副大統領のハリスが後継になり、8 月 22 日に米民主党党大会で大統領候補者指名を受諾した経緯があります。前バイデン政権は優秀なスタッフが主導し、世界保健機関（WHO）や世界貿易機関（WTO）、気候変動対策のパリ協定などの国際枠組みへの復帰や再取組み、インド太平洋経済枠組みや民主主義サミットの立ち上げなど、多国間協調にも積極的に取り組んできており、ハリスのサポートを継続していました。

一方で、共和党の元大統領でもあったトランプ候補は、選挙戦と同時並行で各種司法判決に晒されていましたが、7 月 13 日のトランプ銃撃事件を受けて、生き残った英雄として支持率が跳ね上がっていました。「力による平和への回帰」を党要綱に据え、「アメリカ第一主義」を旗印に一期目以上の強硬な関税賦課や為替レートの調整を公約として掲げており、また複数の国際枠組みからの撤退可能性も取り沙汰されており、関係国に既に影響が出てきていました。また、在任中は米朝会談やロシアのプーチン大統領との対談、中東の和平交渉を頻繁に行っていたため、泥沼化したウクライナ問題、イスラエル・パレスチナ問題への打開が、方向性はさておき一部で期待されていました。

アメリカ政治の新たな方向性も見えてきましたが、選挙自体は得票率数パーセント差で決するため、どちらの候補が勝利しても、アメリカ社会が多くの論点において両極の意見を包含していることに注意を促しました。

講演後、多くの質問や進路相談が寄せられました。たとえば以下です。

Q）リベラルとよくいいますが、そもそもリベラルとは？
A） 国際政治でいうリベラルと国内政治でいうリベラルには異なる意味合いがあります。ここでは国際政治の文脈でお答えします。リベラリズムとの一般的な対立軸はリアリズム（現実主義）です。また、それぞれ古典的なものと、新しいものがあります。

リアリズムは、国家の安全保障と国益を最優先し、力のバランスや軍事力が重要し、力による平和を主張します。一方、リベラリズムは、国際協力の可能性を強調し、国際法や国際機関を通じて平和を促進すると主張します。リベラルな国際秩序は不完全で、世界の一部にのみで享受されており、普遍的ではないとの批判もありますが、同時に完全に否定できるものでもない、と言うところです。

Q）アメリカと日本の民主主義は、どちらも同じ多数決ととらえていいのでしょうか？
A） 前提として、アメリカは大統領制で日本は議院内閣制なので、まず多数決の形が異なります。そしてアメリカでは大統領を選ぶのに選挙人を挟むため多少のブレはありますが、ほぼ直接である一方で、日本の首相を選ぶのは議員で、自民党党首を選ぶのは党内で議員は党員であるため、国民全体としては直接参加できません。また衆議院選挙は小選挙区比例代表並立制になったため、野党が乱立して二大政党が作りにくくなっているのが、アメリカの逆ともいえます。民主主義に完璧な制度は存在せず、常に試行錯誤なのだろうとは思います。

ハリス候補とトランプ候補
https://www.bbc.com/news/articles/cj4x71znwxdo

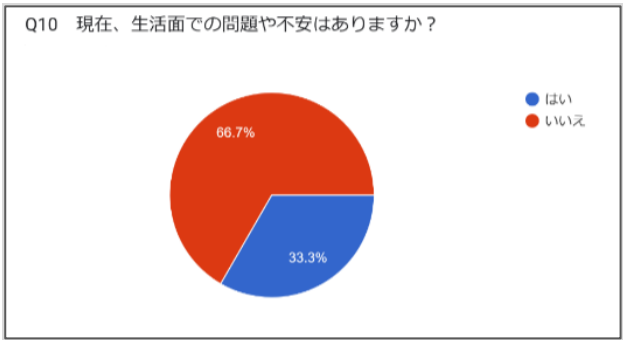
報告3

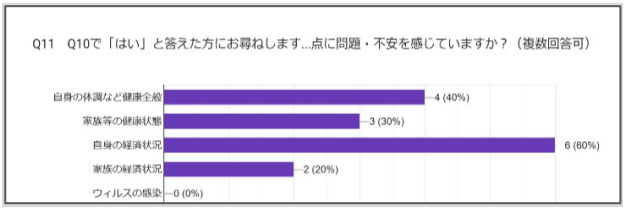
2024 年度国際文化研究科学生生活調査の結果について

中山　真里子（言語科学研究講座　教授）

2024年9月に毎年恒例の『国際文化研究科学生生活調査』が実施されました。（調査期間 8 月 10 日～9 月10日、日本語　回答数 30 名　英語回答者数 11 名）急激な円安や国際状況が激しく変化するなか学生の抱える問題も多角化しているのではないのでしょうか。今回の調査で学生がどのようなことに困っているのか、どのような援助を望んでいるのかについてある程度把握できたのではないかと思います。以下、調査結果について報告いたします。

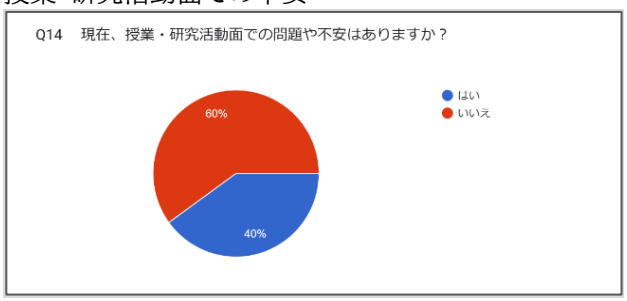
生活面での不安

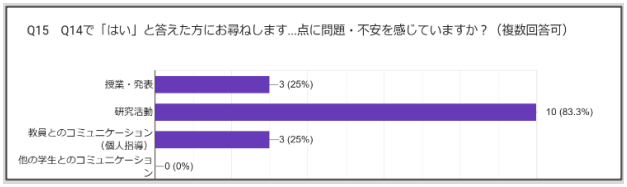




生活面での問題や不安があると感じている学生の過半数が自身の経済状況を理由として挙げており、心と体の健康全般についての不安がそれに続きました。英語による回答（英語コース所属学生）も同様の傾向が見られました。個別回答では、留学生に対する奨学金や生活費支援に比べ、日本人学生を対象とした支援制度が大学全体として少ないことから、研究科による援助を求める声もきかれました。研究科としては、TA/RA をうまく活用することに加え、今後、内部・外部の奨学金の情報を広く周知し、応募を推奨することで学生の経済的不安の解消に働きかけたいと思います。また、心身の不調については、学内施設（東北大学保健管理センター・学生相談・特別支援センター）の紹介と必要に応じて気軽な利用の促しが有効と思います。

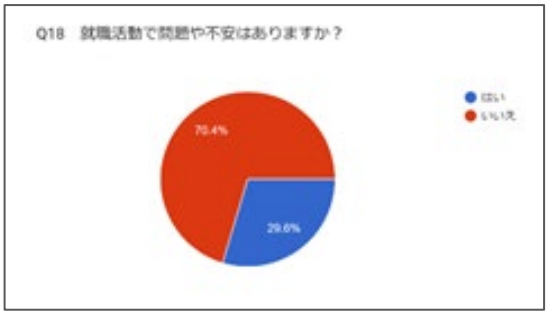
授業・研究活動面での不安

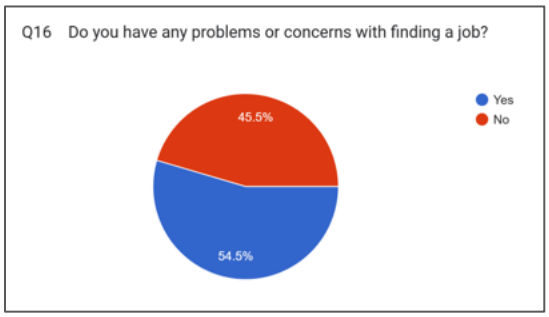




授業・研究活動面に関しても、日本語、英語での回答ともに、同様の傾向が見られ、問題や不安があると答え学生は約40％、その理由は主に自身の研究活動でした。個別の回答では、研究活動に費用がかかるため制限されてしまう、院生として求められるレベルに答えられるか、修士・博士論文の執筆への不安であるなどの声が聞かれました。研究活動の費用については大学院生が応募可能な競争的研究費の獲得、よりコストのかからない研究アプローチを考慮するなど対策が考えられます。研究そのものの進め方や論文執筆については指導教員を密に連携を取りながら研究を進めていくことを、学生へ講座や指導教員が学生に推奨することが助けにつながると思いました。

就職活動での不安





就職活動での不安については、回答言語により違いがあり、日本語の調査で、不安と回答したのは約3割でしたが、英語での調査では 5.5 割と過半数を超えました。

英語の個別回答では、日本国内の就職に関する慣習の違いによる難しさ、日本語能力が必須であることが多いことに付随する就職の難しさが挙げられていました。日本語の個別回答では、就職活動をいつから始めればよいのか、情報はどこで入手すればよいのかという具体的な問題が多く挙げられていました。今後英語プログラムの学生が増加することが見込まれる中、今後は英語プログラムの学生向けの就職支援方法を検討することが必要です。

今回の、『国際文化研究科学生生活調査』では最後に、学生に研究科からサポートが必要な事項や感想コメントを募りました。そこから伺い知れたのは、学生の質問などに対して、教務係や教員が丁寧に接することに大きな感謝を抱いており、学生の安心感につながっているということでした。また英語コースの学生からも教員のプロフェッショナルな対応（公平、論理的）に対して高い満足を得ているという声も聞かれ、教員・職員の日々の対応が学生の不安を減らし、研究や学生生活への意欲や満足度を高めることがわかりました。

アルムニひろば　　同窓生のコラム

張　顔顔
（2023 年 9 月 博士課程後期 3 年の課程修了　言語科学研究講座）

国際文化研究科同窓生の皆様、はじめまして。張顔顔（ちょう がんがん）と申します。令和 5 年 9 月 25 日に本研究科博士後期課程を修了しました。このたび同窓生のコラムを執筆する機会をいただき、大変光栄に思います。本稿では、「現在の近況」「在学中の思い出」「在学生へのメッセージ」「感謝の言葉」の四つに分けて述べたいと思います。

現在の近況

私は現在、中国南部で研究員として働いております。この仕事が与えてくれた貴重な機会に感謝しております。仕事を通じて、人としても大きく成長でき、自分自身の人生を主体的に選択し、創造していきたいという気持ちを持つようになりました。

もし、今が私の 40 回目の転生（まったく同じ人生のシナリオ）だとしたら、私は一体どんな人生を送りたいのでしょうか？この問いの答えを探すため、Work, Consumerism and the New Poor、Leaving Academia: A Practical Guide という二冊の本を読み始めました。

あれこれ考えて悩んだ結果、一旦考えすぎることをやめて、自分の好きなことをしながら過程を楽しもうと思いました。現在は、筋力トレーニングや書籍翻訳、IELTS の試験勉強などに取り組んでおります。また、学術界の外にいる人たちとも交流し、新たな視点や思考に触れることも始めました。これらの新しい経験が今後どんな影響をもたらすのか、とても楽しみです。私は人生を一つの実験と考え、新しいことに勇気をもって挑戦しています。結果に良い悪いの区別はなく、すべてが貴重な経験だからです。

学生時代の思い出

在学中、私はとても涙もろい人間でした。喜怒哀楽のすべてが涙につながるほどでした。こんなに泣いてばかりいたら、さぞかし辛かっただろうと思われるかもしれませんが、実際はその逆でした。国際文化研究科での生活は、とても幸せで、当時はそれが当たり前に感じるほどでした。先生方、教務の方々、そして同級生からいただいた温かいサポートのおかげで、毎日がとても心地よいものでした。研究は時に興奮し、時に気が狂いそうなほど大変でしたが、それでもやめられない魅力がありました。

今思えば、研究や生活において当時の自分の完璧主義すぎる傾向や臆病なところをもう少し改善できたら良かったと思います。しかし、総じて言えば、国際文

化研究科での経験は私の人生の中で最も貴重な体験の一つでした。もう一度選択の機会があっても、私は再び国際文化研究科を選ぶでしょう。

研究室の友達との温泉旅行

在学生へのメッセージ

研究生活はメルボルンの天気のように、予測不能でめまぐるしく変化します。あなたもいろいろな挑戦に直面し、混乱を感じることがあるかもしれません。私は問題解決と心のサポートという二つの観点から、少しでもアドバイスできればと思います。老婆心な話になりますが、どうか役に立つことを願っております。

問題が解決すれば、悩みが軽くなることが多々あります。以下の三冊は、私自身がもっと早く出会っていればよかったと思った本です。まずは目次や気になる章だけでも眺めてみて、自分に役立ちそうかどうか判断すると良いでしょう。これらの書籍は多言語版もありますので、自分に合った言語版を選ぶことができます。

研究方法、タスク管理、心構えに関する本：

Grad School Essentials: A Crash Course in Scholarly Skills

Mastering Your PhD: Survival and Success in the Doctoral Years and Beyond

具体的な書き方に関する本：

Writing Science: How to Write Papers That Get Cited and Proposals That Get Funded

人は機械ではありませんから、感情の波があるのはごく自然なことです。研究面でも精神面でも、あなたが努力し苦労していることをよく理解しております。東北大学の一員として、あなたは一人ではありません。常に誰かがあなたを支えております。あなたが直面している困難は決して永遠に続くわけではありません。

私たちは時に行き詰まり、先が見えないこともありますが、それは一時的なことです。未来にはたくさんの楽しみが待っています。春には大河原の一目千本桜、夏には青葉通の青葉祭り、秋には牛越橋の芋煮会、冬には定禅寺通の光のページェントがあります。もちろん、あなた自身の好きなものを見つけても良いでしょう。あなたがどんな選択をしようとも、私は先輩としてあなたを無条件に応援します。

研究の進展や学術的評価も重要ですが、何よりもあなた自身の健康と幸福が一番重要です。なぜなら、あなたは世界で最も大切な存在だからです。

感謝の言葉

もし私の指導教員である中本武志先生がこのコラムを読まれたら、おそらく鼻で「フン」と笑い、「流れが悪い、何を言いたいか全然わからない」とおっしゃるかもしれません。そんな先生を想像すると、つい笑みがこぼれます。このコラムを通じて、これまでお世話になった一部の先生方や職員の皆様に感謝を申し上げます。（紙面の都合上、一部の方のみの掲載となります。）

- 川平芳夫先生（故人）
- 江藤裕之先生
- 中本武志准教授
- 福島雅代様（教務係）

私を受け入れ、見守ってくださり、ありがとうございました。皆さんの温かさは決して忘れません。またいつの日かお会いできることを楽しみにしております。

近藤　慶太郎
（2024 年 3 月　博士課程前期2年の課程修了　多文化共生論講座）

2024 年 3 月に多文化共生論講座博士前期課程を修了した近藤慶太郎と申します。現在は、日本貿易振興機構（ジェトロ）で欧州の政治経済などに関する調査の仕事をしております。同窓会会報への寄稿についてお声がけいただき大変嬉しく感じております。私にとって、人生初のコラム執筆です。今回は、在学中の思い出として私の研究活動を振り返り、在学生の皆さまへメッセージをお伝えしたいと思います。

大雪の卒業式

私は 2021 年 4 月に国際文化研究科多文化共生論講座に入学しました。修士論文のタイトルは「ベルリンの壁構築による東ベルリン境界地域の住民移動」です。この研究は、冷戦期のベルリンにおいて「ベルリンの壁」が築かれたことにより、旧東ベルリンの境界地域の住民が被った影響を人の移動という観点から解くという内容でした。指導教員である佐藤雪野先生をはじめ、多文化共生論講座の藤田恭子先生、佐藤透先生、坂巻康司先生、目黒志帆美先生など、本当に多くの方々に手厚く心優しいご指導やご助言をいただき完成させることができました。改善点や磨き足りない部分は多々ありますが、「良い研究ができたな」と心から思っております。ただ、この論文の完成に至るまでの道は長く、多くの壁にぶつかりました。

学部の卒業論文で、移民排斥などを謳うドイツの極右運動について研究をした私は、外国人に対する差別や偏見はなぜ生まれるのか、どうしたら防げるのかという問題意識を持ち、国際文化研究科ではワークショップ・実験型の研究を行おうと考えておりました。しかし、入学した 2021 年 4 月というのはコロナ禍の真っ只中で、この研究を行うことは現実的に難しく、研究テーマを考え直すことにしました。「出遅れてしまった」と焦る気持ちを抑えながら色々と思案した結果、「ドネルケバブ」（ドイツのトルコ系移民が考案したとされるケバブ）に着目し、ドイツにおける移民・難民を取り巻く状況を「食」という切り口から研究するという方向に舵を切りました。しかし、驚くほど全く研究が捗りません。焦りの中で無理やり案を捻り出したという感も拭えず、本当にこのテーマでいいのか、本当に自分が研究したいことは何かと自問自答が続きました。

そんなこんなで完全に迷走していた折、藤田先生から「納得できる道を探してください」という言葉をいただきました。私は原点に立ち返り、自分自身と真正面から向き合いました。そうして出た答えが、「分断期のドイツ、ベルリンの壁について研究する」というものでした。ここから再び研究が進み始めます。途中、学業や進路に関する悩みから暫し休学もしましたが、研究とは向き合い続けました。なんだかんだで、研究の虜になっていたのだと思います。次第に、「人の移動」という観点も加わり、修論の下地が固まり始めました。人の移動をどう調べるかという問題にも直面しましたが、2022 年 11 月下旬ごろ転機が訪れました。学部時代の恩師と会うことになり、少しでも研究を進めて良い報告がしたいと考えていたとき、ふと「パン屋だ…」という考えが現れました。パンはドイツで主食であり、人が住むところにパン屋はあります。パン屋の位置の変化を追えば、住民の動きを間接的に観察することができるのではないかという発想が浮かんだのです。まさに、「降ってきた」という感じでした。佐藤雪野先生にもこれをお伝えしたところ、笑顔でゴーサインをいただき、そこからは全力で研究に取り組みました。そうして、最終的には修論の完成に辿り着き、口頭試問と発表会を無事に乗り越え、修了・卒業することができました。

在学中は、本当に呆れるほど悩んだり、つまずいたりしました。ですが、それでも研究は楽しかったです。壁にぶつかる度、考えて考えて、なんとか這い上がったからこそ、納得できる道を見つけ今に辿り着くことができたのだと思います。

終わりに、大変僭越ながら在学生の皆さまにメッセージをお送りしたいと思います。皆さまはきっと、順調に国際文化研究科での日々を過ごされていると思います。しかし、もし研究や進路のことなどで悩まれている方がいらっしゃったら、「原点回帰」を試してみてください。何がしたいか、どうしたいか、どうありたいか、どうなりたいか…壁にぶつかってしまったとき、自分の「原点」を見つめ直すと、ヒントや答えが見えてくるかもしれません。ご自身の興味、関心、問題意識をはじめ、趣味や好きなことなども洗いざらい思い浮かべてみてください。実際に行動してみたり、気分転換に散歩や買い物、旅行に行ったりするのも良いかもしれませんね。ヒントは意外なところにあるかもしれません。皆さまが、理想の道、納得できる道を進めるよう心から応援しております。

初出張で行ったセルビアでの一枚（セルビア宮殿）

事務局より

事務局からのお願い

①メールアドレス届出のお願い

社会でご活躍されている皆様との繋がりを維持・強化し、研究科から皆様への情報発信を充実したものにするため、同窓会ホームページに掲載している届出用フォームより、皆様の連絡先(メールアドレス)等の情報をご提供いただきますようお願い申し上げます。

いただきました情報は、本学および本研究科同窓会関連の連絡や修了生向けの連絡に使用し、その他の用途に用いず、適正に管理いたします。皆様のご協力を何卒お願い申し上げます。

②会費納入・「国際文化研究科教育研究支援基金」ご協力のお願い

会則 12 条に基づき、学生会員の皆様には会費等の納入をお願いいたします。

第12条　学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。
2　入会金は2，000円とし、初めて学生会員となったとき1回に限り納入する。
3　会費は、次のとおりとする。
(1)国際文化研究科前期課程の学生　2，000円
(2)国際文化研究科後期課程の学生　3，000円

会費は、郵便局からお振り込みください。
郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会
郵便振替口座番号：02220-5-66621

上記以外の方(在学生、修了生、現・元教職員などの皆様)には、国際文化研究科　教育研究支援基金へのご支援をいただければ幸いです。

＜国際文化研究科　教育研究支援基金＞
https://www.kikin.tohoku.ac.jp/project/support_the_depertment/GSICS

郵便振替・銀行振込のほか、
クレジットカード決済
コンビニ決済も可能です。

同窓会総会

第23 回同窓会総会報告

第 23 回総会を 2025 年 3 月 5 日(水)にオンラインで開催しました。

第24 回同窓会総会について

次回の同窓会総会は、2026 年3月に開催予定です。詳細が決定しましたら、同窓会ホームページ等でご案内いたします。

==========

東北大学国際文化研究科同窓会事務局
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL: 022-795-7556
E-MAIL: int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp
国際文化研究科同窓会ホームページ
https://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/